

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(小学校, 中学校)

第3編 単元(題材)ごとの学習評価について(事例)

【案】

**国立教育政策研究所
教育課程研究センター**

第1章 「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方を踏まえた評価規準の作成

1 本編事例における学習評価の進め方について

各教科の単元（題材）における観点別学習状況の評価を実施するに当たり，まずは年間の指導と評価の計画を確認することが重要である。その上で，学習指導要領の目標や内容，「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方等を踏まえ，以下のように進めることが考えられる。なお，複数の単元（題材）にわたって評価を行う場合など，以下の方法によらない事例もあることに留意する必要がある。

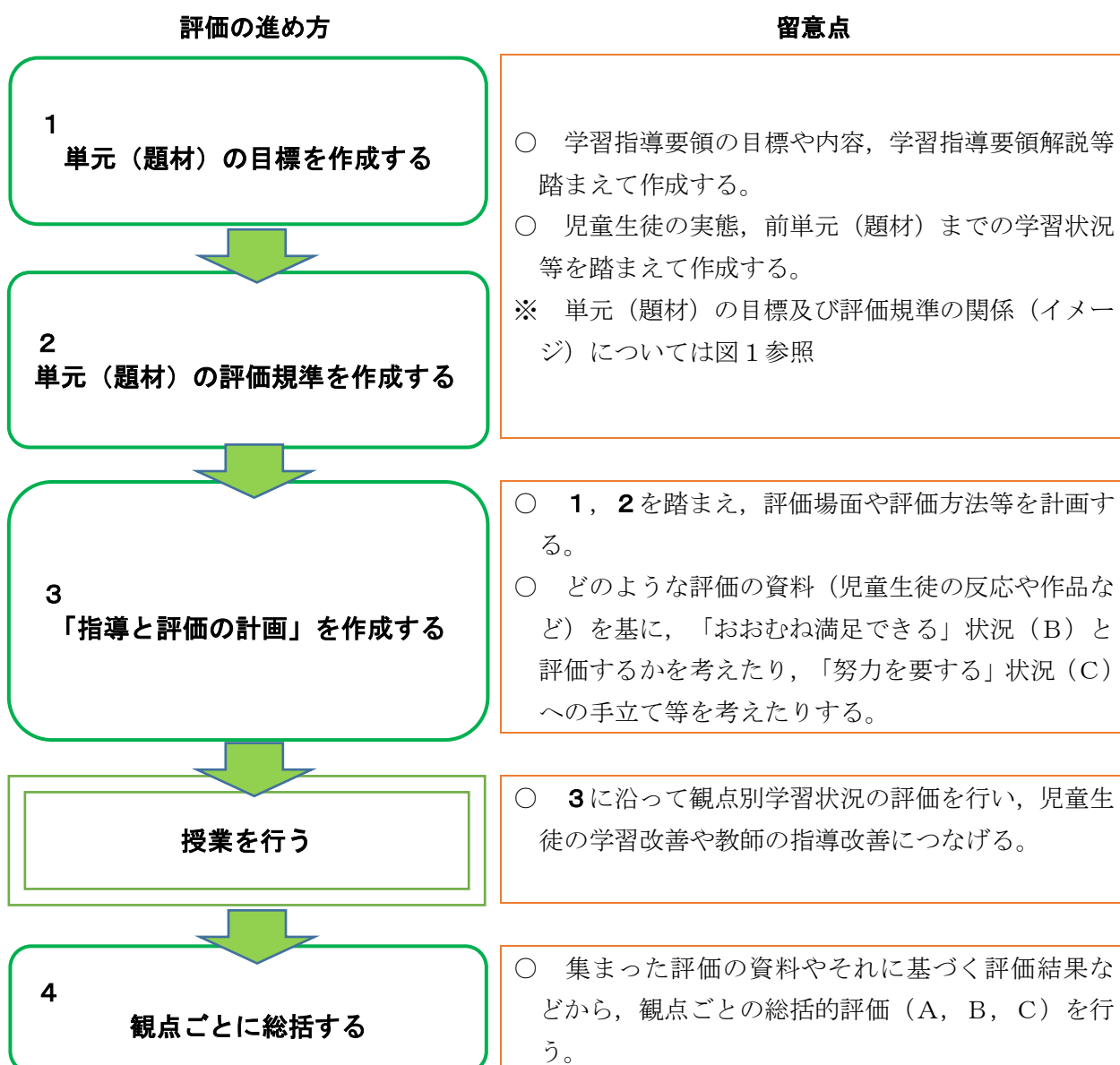
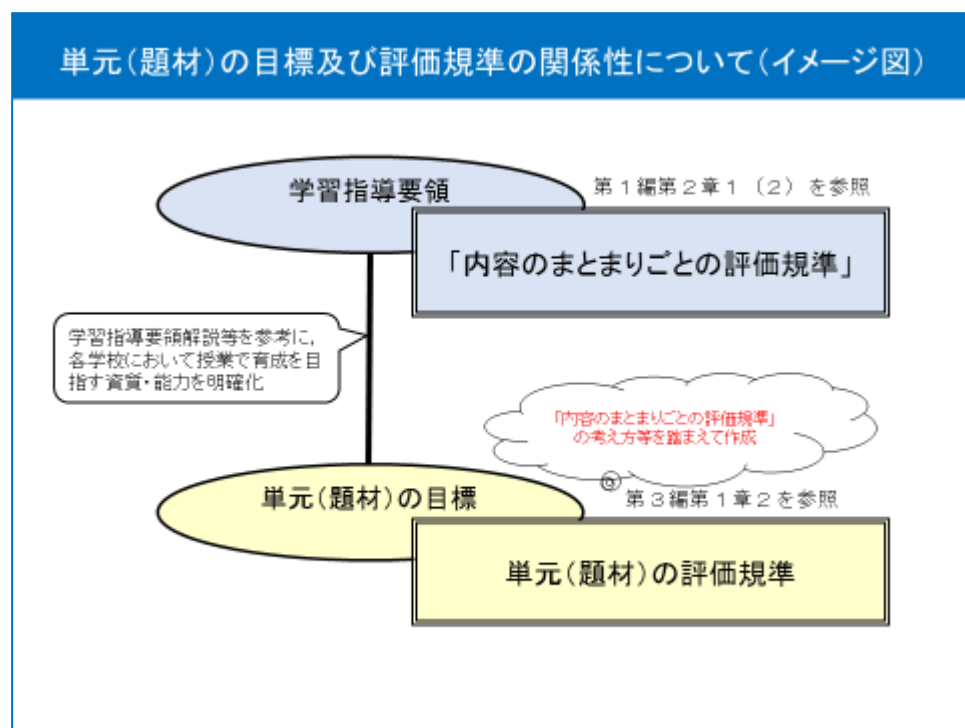


図 1



※ 調整中

保健体育科（体育分野） 事例 1

キーワード：体育分野における指導と評価の全体像

単元名 球技：ゴール型（サッカー）

第 1 学年

内容のまとめり

第 1 学年及び第 2 学年「E 球技」

1 単元の目標

- (1) 次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、球技の特性（や成り立ち）、技術の名称や行い方、（その運動に関連して高まる体力）（など）を理解するとともに、基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームを展開することができるようにする。
ア ゴール型では、ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防をすることができるようにする。
- (2) 攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
- (3) （球技に積極的に取り組むとともに）、（フェアなプレイを守ろうとすること）、（作戦などについての話し合いに参加しようとする）、（一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとする）、仲間の学習を援助しようとする（など）や、健康・安全に気を配ることができるようにする。

本事例では、単元の目標は学習指導要領「2 内容」を踏まえ、第 1 学年及び第 2 学年の目標を全て記述した上で、図 1 A 中学校における年間指導計画の例」の球技①～⑤の 5 回の単元設定の中から、①のサッカーにおける単元の目標を明示するため、他の単元で指導し評価する部分については、（ ）で示している。

2 単元の評価規準（学習活動に即した評価規準）の作成及び指導と評価の計画の作成

手順 1 内容の取扱いを踏まえ、年間指導計画に各単元を位置付ける。

本事例の A 中学校では、学習指導要領の第 1 学年及び第 2 学年の内容の取扱いにおいて、「A から U までを全ての生徒に履修させること」としていることを踏まえ、第 1 学年で①ゴール型、②ネット型、第 2 学年で③ネット型、④ベースボール型、⑤ゴール型を取り上げている。

図 1 A 中学校における年間指導計画の例（第 1 学年及び第 2 学年抜粋）

学年	時間	4			5			6			7			9			10			11			12			1			2			3		
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
第1学年及び第2学年	105	オリエンテーション	理論 [1]	陸上競技 [10] 短距離・リレー(5) ハードル(5)			① 球技・ゴール型 バスケットボール・サッカー 選択 2クラス2展開 [10]					水泳 クロール・平泳ぎのいずれかを含む2以上選択 [10] * 外部指導者のTTIによる協力					武道 (柔道・剣道のいずれかを選択) 2クラス2展開 [14] * 外部指導者のTTIによる協力					器械運動 マット運動(7) 跳び箱運動、鉄棒運動、平均台運動より 1選択(7) [14]					② 球技・ネット型 バレーボール・テニス 選択 2クラス2展開 [8]					スケート [6]集中		
		体づく運動 4つくり(2集り含)運動	保健(1)健康の成り立ちと疾病の発生要因／生活習慣と健康 [4]					体づくり運動 (2)		理論 [1]	保健(2)心身の機能の発達 [6]			保健(2)心の健康 [6]					陸上競技 長距離走 [4]			理論 [1]	体づくり運動 [3] 組み合わせ											
	105	体づくり運動 [3]	陸上競技 跳躍種目選択 走り高跳び・走り高跳び 2クラス2展開 [8]			③ 球技・ネット型 バレーボール・バドミントン 選択 2クラス2展開 [10]					水泳 クロール・平泳ぎのいずれかを含む2以上選択 [10]					④ 球技・ベースボール型 ソフトボール① ソフトボール② 2クラス2展開 [12]					ダンス 現代的なリズムのダンス(9) ・フォークダンス(9) 2クラス2展開 [18] * 外部指導者のTTIによる協力					⑤ 球技・ゴール型 ハンドボール・サッカー選択 2クラス2展開 [10]					スキー [6]集中			
		理論 [1]				保健 (1)生活習慣病などの予防／喫煙、飲酒、薬物乱用と健康 [8]					体づくり運動 [2]		理論 [1]	保健 (3)傷害の防止 [8]					陸上競技 [4] 長距離走			理論 [1]	体づくり運動 [3] 組み合わせ											

「知識及び技能」の指導事項については、型ごとに指導する必要があるため、ゴール型とネット型は2回の指導機会、ベースボール型は1回の指導機会を取り上げることとなる（ネット型、ベースボール型は省略）。このことから、例えば、運動の特性については、ゴール型、ネット型、ベースボール型のそれぞれにおいて効率的に指導機会を設けるなどの工夫をしている。また、「思考力、判断力、表現力等」及び「学びに向かう力、人間性等」で示される具体的な指導事項は、内容のまとめり（「E 球技」）に対して示されていることから、意図的、計画的に配置している。

●重点指導機会 ○複数回での指導機会 *評価対象とせず指導する機会

手順 3 学習指導要領解説例示等を基に、第 1 学年及び第 2 学年の内容のまとめ（「E 球技」）における全ての「単元の評価規準（学習活動に即した評価規準）」を設定する。

表 1 第 1 学年及び第 2 学年「球技」の全ての「単元の評価規準（学習活動に即した評価規準）」

知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○知識 - 球技には、集団対集団、個人対個人で攻防を展開し、勝敗を競う楽しさや喜びを味わえる特性があることについて、言ったり書き出したりしている。 - 学校で行う球技は近代になって開発され、今日では、オリンピック・パラリンピック競技大会においても主要な競技として行われていることについて、言ったり書き出したりしている。 - 球技の各型の各種目において用いられる技術には名称があり、それらを身に付けるためのポイントがあることについて、学習した具体例を挙げている。 - 対戦相手との競争において、技能の程度に応じた作戦や戦術を選ぶことが有効であることについて、学習した具体例を挙げている。 - 球技は、それぞれの型や運動種目によって主として高まる体力要素が異なることについて、学習した具体例を挙げている。	○技能 - ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをすることができる。 - マークされていない味方にパスを出すことができる。 - 得点しやすい空間にいる味方にパスを出すことができる。 - パスやドリブルなどでボールをキープすることができる。 - ボールとゴールが同時に見える場所に立つことができる。 - パスを受けるために、ゴール前の空いている場所に動くことができる。 - ボールを持っている相手をマークすることができる。 ※ネット型、ベースボール型は省略	- 提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えている。 - 提供された練習方法から、自己やチームの課題に応じた練習方法を選んでいる。 - 学習した安全上の留意点を、他の学習場面に当てはめ、仲間に伝えている。 - 練習やゲームの場面で、最善を尽くす、フェアなプレイなどのよい取組を見付け、理由を添えて他者に伝えている。 - 仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方を見付けている。 - 仲間と話し合う場面で、提示された参加の仕方に当てはめ、チームへの関わり方を見付けている。 - 体力や技能の程度、性別等の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習やゲームを行う方法を見付け、仲間に伝えている。	- 球技の学習に積極的に取り組もうとしている。 - マナーを守ったり相手の健闘を認めたりして、フェアなプレイを守ろうとしている。 - 作戦などについての話合いに参加しようとしている。 - 一人一人の違いに応じた課題や挑戦及び修正などを認めようとしている。 - 練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。 - 健康・安全に留意している。

手順 4 当該単元における単元の評価規準（学習活動に即した評価規準）を設定する。

「球技における 2 年間を見通した指導事項の配置の例」（図 2）に示した通り、中学校第 1 学年「球技」（ゴール型）（図 1 の①）に配置された指導事項に対応した単元の評価規準を設定する。

表 2 A 中学校における第 1 学年球技ゴール型の単元の評価規準（学習活動に即した評価規準）の例

知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○知識 ①球技には、集団対集団、個人対個人で攻防を展開し、勝敗を競う楽しさや喜びを味わえる特性があることについて、言ったり書き出したりしている。 ②球技の各型の各種目において用いられる技術には名称があり、それらを身に付けるためのポイントがあることについて、学習した具体例を挙げている。	○技能 ①ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをすることができる。 ②得点しやすい空間にいる味方にパスを出すことができる。 ③ボールとゴールが同時に見える場所に立つことができる。	①提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えている。 ②仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方を見付けている。 ③仲間と話し合う場面で、提示された参加の仕方に当てはめ、チームへの関わり方を見付けている。	①練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。 ②健康・安全に留意している。

手順5 当該単元における具体的な指導内容の明確化を図る。

単元の目標の実現には、具体的な指導を充実した上で、単元の評価規準（学習活動に即した評価規準）により評価を行うことが重要である。そのため、学習指導要領解説の記載等から、生徒の学習状況を実現するための具体的な指導内容を明確にする。

表3 具体的な指導内容と単元の評価規準（学習活動に即した評価規準）

知識及び技能		思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
知識	技能		
ゴール型球技は、ドリブルやパスなどのボール操作で相手コートに侵入し、シュートを放ち、一定時間内に相手チームより多くの得点を競い合うことが楽しい運動であること。 ↓ ①球技には、集団対集団、個人対個人で攻防を展開し、勝敗を競う楽しさや喜びを味わえる特性があることについて、言ったり書き出したりしている。 ボール操作には、シュートやパス、ボールをキープする技術の名称があること。それらを身に付けるポイントがあること。 ↓ ②球技の各型の各種目において用いられる技術には名称があり、それらを身に付けるためのポイントがあることについて、学習した具体例を挙げている。	守備者のいない位置に移動した時にシュートを打つこと。 ↓ ①ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをするができる。 フリーの仲間を見付け、相手の動きに合わせてパスを送り出すこと。 ↓ ②得点しやすい空間にいる味方にパスを出すことができる。 ボール保持者とゴールが見える位置に移動し、ボールを受ける準備姿勢をとること。 ↓ ③ボールとゴールが同時に見える場所に立つことができる。	成功例、つまずき例などの事例や、シュート、パス、キープのポイントを提示し、仲間の動きと比較し、伝えること。 ↓ ①提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えている。 活動時間の確保やグループの人間関係がよくなるといった目的を伝え、用具の準備や後片付け、記録や審判などの分担した役割における自身の活動の仕方を見付けること。 ↓ ②仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方を見付けている。 仲間の意見をしっかりと聞く、自身の意見を述べるなどの話し合いへのマナーを提示し、参加の仕方を見付けること。 ↓ ③仲間と話し合う場面で、提示された参加の仕方に当てはめ、チームへの関わり方を見付けている。	仲間の学習を援助することは、自己の能力を高めたり仲間との連帯感を高めて気持ちよく活動したりすることにつながるという目的に適した仲間との関わり方があること。 ↓ ①練習の補助をしたり仲間にも助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。 体調の変化などに気を配ること、ボールなどの用具の扱い方や、ゴールの設置状態、練習場所などの自己や仲間の安全に留意すること、技能の難易度や自己の体力や技能の程度に合った運動をすることが大切であること。 ↓ ②健康・安全に留意している。

手順6 指導と評価の計画(10時間)を作成する。

単元の目標、内容、評価規準が具体化され、指導場面や評価機会が関連付けられた指導と評価の計画を作成する。その際、目標の実現に向けて、指導したことを評価すること、「努力を要する」状況と判断される生徒への指導の充実が速やかに図ることができるよう、評価の機会を適切に設定することなどに留意する。

図 3：指導と評価の計画の例

単元の目標	知識及び技能	次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、球技の特性や（成り立ち）、技術の名称や行い方、（その運動に関連して高まる体力）（など）を理解するとともに、基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームを展開することができるようにする。 ア ゴール型では、ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防をすることができるようにする。											
	思考力、判断力、表現力等	攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。											
	学びに向かう力、人間性等	（球技に積極的に取り組むとともに）、（フェアなプレイを守ろうとすること）、（作戦などについての話し合いに参加しようとする）、（一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとする）、仲間の学習を援助しようとする（など）や、健康・安全に気を配ることができるようにする。											
	時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	授業づくりのポイント	
学習の流れ	0	健康観察・本時のねらいの確認・準備運動											・三つの資質・能力の内容をバランスよく指導する。 ・動きの獲得を通して、知識の大切さを一層実感できるようにする。 ・汎用性のある知識を精選した上で、知識の学習を基盤とした学習の充実を図る。 ・ゴール前の空間の攻防をめぐる学習に課題を追求しやすいようにプレイヤーの人数、コートの広さ用具、プレイ上の制限を工夫したゲームを取り入れる。 ・練習やゲームでは、即時にアドバイスをし合うことができるようにし、学習の振り返りで質を高めていく。 ・仲間への助言や安全に留意する意義などの理解と具体的な取り組み方を結び付けて指導する。
	10	オリエンテーション	ボール操作 シュート パス トラップ		ボール操作の反復練習						ゲームの修正 最終リーグ戦Ⅰ	最終リーグ戦Ⅱ	
	20				空間に走り込むなどの動き ボールとゴール		課題の確認と解決の練習 ボール 空間に 操 作 走りこむ 課題伝達 役割、安全見つめる						
	30								簡易ゲームⅠ 人数・コート・ルール等の簡易化				
	40												
50	整理運動・学習の振り返り・次時の確認											単元のまとめ	
評価の機会		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	総括的評価	学習カード
	知	①	(②)	(②)		②							観察、記録
	技			①		②	③						学習カード、観察
	思						②	①		③			観察、学習カード
	態		②		①								
単元の評価規準 （学習活動に即した評価規準）	知	①球技には、集団対集団、個人対個人で攻防を展開し、勝敗を競う楽しさや喜びを味わえる特性があることについて、言ったり書き出したりしている。 ②球技の各型の各種目において用いられる技術には名称があり、それらを身に付けるためのポイントがあることについて、学習した具体例を挙げている。											
	技	①ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをすることができる。 ②得点しやすい空間にいる味方にパスを出すことができる。 ③ボールとゴールが同時に見える場所に立つことができる。											
	思	①提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えている。 ②仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方を見付けている。 ③仲間と話し合う場面で、提示された参加の仕方に当てはめ、チームへの関わり方を見付けている。											
	態	①練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。 ②健康・安全に留意している。											

以下、本事例の単元の進行と指導内容の関連について概要を説明する。

本事例では1時間目を診断的な評価機会とし、小学校における学びの状況を確認する。また、2時間目から9時間目では、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の指導事項をバランスよく配置するとともに、形成的な評価機会を設定している。さらに、10時間目に観点別学習状況の評価の総括的評価を位置付けている。例えば、2・3時間目に指導したボール操作の技能については、5時間目に「技②」の評価規準に基づき評価する。その際、「努力を要する」状況と判断される生徒がいた場合には個別の指導を行うなどの手立てを行い、単元の進行とともに、その生徒の学習状況の変化を10時間目に最終確認している。

また、図3の矢印で示すように、シュートであれば、2時間目に技術的なポイント（知識）の学習機会を設け、練習場面を2時間目に設定した上で3時間目に「技①」の評価を行う。さらに発見した課題について、7時間目にシュートをテーマとした課題解決の時間を設け、動きのポイントやつまずきについて仲間の課題や出来映えを伝えるなど、知識や技能を活用して「思考力、判断力、表現力等」の学習や評価につなげることができるよう、各指導内容間の関連を図る工夫をしている。

3 観点別学習状況の評価の進め方

（1）指導と評価の一体化に向けた観点別学習状況の評価の活用

単元途中の観点別学習状況の評価は、生徒一人一人の学習状況を明確にし、生徒の学習改善につなげると同時に、教師は指導の成果や課題を明らかにするものである。このことから、観点別学習状況の評価は、単元の終末にまとめて行うものとして捉えるのではなく、指導場面に対して評価の機会を検討し設定することが重要である。

また、生徒の学習状況を的確に把握するため、日々の授業での一人一人の様子を評価補助簿等に記録し、特に、「努力を要する」状況（C）の生徒に対して手立てを講じることが重要になってくる。例えば、評価した結果を具体的な言葉かけなどにより生徒に返して学習の改善を促したり、教師の指導の手立てを修正したりするなど、評価を指導に生かしていくようにする。

併せて、「十分満足できる」状況（A）の生徒の把握にも努め、個別の課題を与えるなどの指導を行う。

本事例では、適切な評価時期に、各観点に対応する適切な評価方法により個々の生徒の評価材料を収集し記録を残すとともに、必要な手立てや指導を行い、必要に応じて修正を図りながら、総括的評価において最終確認し、観点別学習状況の評価を確定している。

以下に、本事例の教師の評価補助簿の例を示す。

図4：評価補助簿の例

単元の評価規準 (学習活動に即した評価規準)	知	①球技には、集団対集団、個人対個人で攻防を展開し、勝敗を競う楽しさや喜びを味わえる特性があることについて、言ったり書き出したりしている。 ②球技の各型の各種目において用いられる技術には名称があり、それらを身に付けるためのポイントがあることについて、学習した具体例を挙げている。								
	技	①ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをすることができる。 ②得点しやすい空間にいる味方にパスを出すことができる。 ③ボールとゴールが同時に見える場所に立つことができる。								
	思	①提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えている。 ②仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方を見付けている。 ③仲間と話し合う場面で、提示された参加の仕方に当てはめ、チームへの関わり方を見付けている。								
	態	①練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。 ②健康・安全に留意している。								
観点	知		技			思			態	
	①	②	①	②	③	①	②	③	①	②
時数/10	1/10	5/10	3/10	5/10	6/10	7/10	6/10	9/10	4/10	2/10
月/日	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
生徒イ			A	A	A	A			A	
生徒ロ			A							AB※1 7/10
生徒ハ		C※2 10/10					レ A※3 10/10	A		A
生徒ニ				C※4 7/10						
— 略 —										
生徒ミ				A			A			

※ 記載のないところは「B」としている。

※2 「C※2 10/10」は、10時間目にCをBに修正したことを示している。

※3 「レ A※3 10/10」は、10時間目にBをAに修正したことを示している。

(2) 学習評価の妥当性・信頼性を高める観点別学習状況の評価の工夫

本事例においては、図3の指導と評価の計画(P5参照)に従って各指導内容について十分な指導を行いながら、形成的な評価に結び付けている。また、「努力を要する」状況の生徒には、課題を提示したり個別の指導を行ったりした。その上で、改善が見られた生徒については評価の修正を加えるとともに、10時間目の総括的評価の場面で、必要な観点や個々の生徒について最終確認を行う工夫をしている。

以上のことについて、図4の生徒ロ、生徒ハ、生徒ニを例に説明する。

ア 「知識・技能」の「知②」について、生徒ハは、5時間目ではCの評価であったが、知識と技能を関連させて指導を行い、10時間目の総括的評価で「おおむね満足できる」状況が認められたことからBに変更した(※2)。

イ 「知識・技能」の「技②」について、生徒ニは、5時間目ではCの評価であったが、課題解決の学習に取り組み、7時間目の簡易ゲームで「おおむね満足できる」状況と認められたことからBに変更した(※4)。

ウ 「思考・判断・表現」の「思②」について、生徒ハは、6時間目の評価はBであったが、10時間目の総括的評価のまとめにおいて、「十分満足できる」状況となっていたことからAに変更した(※3)。

エ 「主体的に学習に取り組む態度」の「態②」について、生徒ロは、2時間目の評価はAであったが、用具の扱い方や練習場所の安全な位置取りなどの安全への留意が継続して「十分満足できる」状況と認められなかったことから、7時間目にBに変更した(※1)。

4 観点別学習状況の評価の総括及び評定への総括の考え方

観点別学習状況の評価の総括及び評定への総括を行うに当たり、学校内で共通の評価への考え方や総括の方法を確定しておく必要がある。また、こうした学校の方針等を踏まえ、保健体育科としての考え方、総括の方法についても十分な検討と共通理解を図っておくことが重要である。

(1) 各単元における観点別学習状況の評価の総括

ア 各観点における学習状況評価を、A、B、Cの三段階で実施するか、それとも、この段階から5段階で評価し、評定への総括に備えるのか決定しておく必要がある。

(例 A[○]、A、B、C、C[×])。

イ A、B、Cの数を基に総括するか、例えば、A=3、B=2、C=1のように数値によって表し総括するのか、生徒の学習状況に対して、どちらが実態を捉えたものとなっているのかなどの検討が必要となる。また、3回の評価が「A B B」ならB、 $2.5 \geq B \geq 1.5$ など、予めA B Cの組み合わせから確定した総括表や、評価を確定するための数値の範囲を作成しておく必要がある。

ウ 「知識・技能」の観点においては、知識と技能の評価をそれぞれ行い、その後「知識・技能」の観点別学習状況の評価に総括する方法が考えられる。その際も、A、B、Cの数を基に評価するのか、数値に表して合計したり、平均したりして総括するのかなど、総括の方法について検討し、決定しておく必要がある。(事例2において、参考例を示している。)

(2) 学期末等における観点別学習状況の評価の評定への総括

ア 各単元の観点別学習状況の評価から学期末等の観点別学習状況の評価への総括

各単元で総括したA、B、Cの数をもとに総括するのか、あるいは、学期末等まで各単元において実施した、全ての単元の評価規準(学習活動に即した評価規準)の評価結果(A、B、C)を数値で表し、合計したり、平均したりして総括するのか決定しておく。

イ 総括した各観点別学習状況の評価から評定への総括

(ア) 三つの観点別学習状況の評価のA、B、Cの数を基に評定へ総括する場合、「A A A」は5又は4、「B B B」は3、「C C C」は2または1と判断される。このように、3段階の評価から5段階への評定の判断について、あらかじめ各学校で基準を決めておく必要がある。

(イ) 三つの観点別学習状況の評価のA、B、Cを数値によって表し総括した場合、この数値を用い、合計したり、平均したりして評定へ総括する方法が考えられる。その際、総括結果をA、B、Cとする数値の範囲を決定しておく必要がある。

なお、その他にも、各単元への配当時間数や指導事項に対応した評価規準数を考慮するのか、観点別学習状況の評価を評定へ総括する際に観点ごとの比率を設定するのか等も含め、観点別学習状況の評価の総括及び評定への総括についての考え方や方法等を、各学校において十分検討しておく必要がある。さらに、シラバスやオリエンテーション等の機会を通して、事前に生徒及び保護者等に対して十分な説明をしておくことが重要となる。

保健体育科（保健分野）事例 1

キーワード 指導と評価の計画から評価の総括まで

単元名

傷害の防止

内容のまとめ

第2学年 （3）傷害の防止

1 単元の目標

- (1) 交通事故や自然災害などによる傷害の発生要因，交通事故などによる傷害の防止，自然災害による傷害の防止，応急手当の意義と実際について，理解することができるようにするとともに，心肺蘇生法などの技能を身に付けることができるようにする。
- (2) 傷害の防止に関わる事象や情報から課題を発見し，自他の危険の予測を基に，危険を回避したり，傷害の悪化を防止したりする方法を考え，適切な方法を選択し，それらを伝え合うことができるようにする。
- (3) 傷害の防止について，自他の健康の保持増進や回復についての学習に自主的に取り組もうとすることができるようにする。

2 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①交通事故や自然災害などによる傷害は，人的要因や環境要因などが関わって発生することについて，言ったり，書き出したりしている。 ②交通事故による傷害の多くは，安全な行動，環境の改善によって防止できることについて，言ったり，書き出したりしている。 ③自然災害による傷害は，災害発生時だけでなく，二次災害によっても生じることや，災害に備えておくこと，安全に避難することによって防止できることについて，言ったり，書き出したりしている。 ④応急手当を迅速かつ適切に行うことによって，傷害の悪化を防止することができ	①傷害の防止について，それらに関わる事柄や情報などを整理したり，個人生活と関連付けたりして，自他の課題を発見している。 ②自然災害などによる傷害の防止について，習得した知識を自他の生活に適用したり，傷害の状態に合わせて悪化を防止する方法を見いだしたりして，傷害を引き起こす様々な危険を予測し，回避する方法を選択している。 ③傷害の防止について，自他の危険の予測や回避の方法と，それを選択した理由などを，他者と話し合ったり，ノートなどに記述したりして，筋道を立てて伝え合っている。	①傷害の防止について，課題の解決に向けた学習活動に自主的に取り組もうとしている。

ることや、応急手当の方法について、言ったり、書き出したりしているとともに、包帯法や止血法としての直接圧迫法、心肺蘇生法ができる。		
--	--	--

※「単元の評価規準」は単元の目標を踏まえるとともに、「知識・技能」や「思考・判断・表現」は学習指導要領解説保健体育編の内容や例示等を基に、「主体的に学習に取り組む態度」は第2編で示した評価の観点の趣旨を参考にして、実際の学習活動をイメージして作成した。また、評価規準の数は、本単元が8時間であることから、3観点合計で8つに精選した。

3 指導と評価の計画（8時間）

時間	ねらい・学習活動	重点	記録	評価方法
1 交通事故や自然災害などによる傷害の発生要因	傷害の防止について、課題の解決に向けた学習活動に自主的に取り組み、交通事故や自然災害などによる傷害は、人的要因や環境要因などが関わって発生することについて理解することができるようにする。 1 傷害の防止についての課題に気付く。 2 交通事故や自然災害などによる傷害について、課題の解決に向けてグループで話し合う。 3 グループでの話し合いを基に全体で意見交換をする。 4 交通事故や自然災害などによる傷害の発生は人的要因、環境要因が関わって発生することをワークシートにまとめ、発表する。	態 ① 知 ①	○	（学習活動2） 傷害の防止について、課題の解決に向けた学習活動に自主的に取り組もうとしている状況を【観察】で捉える。〈態－①〉 ※教師の指導改善のための評価 （学習活動4） 交通事故や自然災害などによる傷害は、人的要因や環境要因などが関わって発生することについて、言ったり、書き出したりしている内容を【観察・ワークシート】で捉える。〈知－①〉
2 交通事故などによる傷害の防止	交通事故による傷害の多くは、安全な行動、環境の改善によって防止できることについて理解することができるようにする。 1 中学生の交通事故の特徴について、教科書等の資料や自分たちの生活を振り返り、調べる。 2 様々な交通事故事例の共通点から、人的要因と環境要因についてグループで話し合う。 3 交通事故による傷害の多くは、安全な行動、環境の改善によって防止できることについてワークシートにまとめ、発表する。	知 ②	○	（学習活動3） 交通事故による傷害の多くは、安全な行動、環境の改善によって防止できることについて、言ったり、書き出したりしている内容を【観察・ワークシート】で捉える。〈知－②〉

3	傷害の防止について、それらに関わる事柄や情報などを整理したり、個人生活と関連付けたりして、自他の課題を発見することができるようにする。 1 事故や犯罪が原因となる傷害の例を取り上げて、人的要因と環境要因についてグループで話し合う。 2 交通事故や犯罪が原因となる傷害にはどのような課題があるのか、それらを防ぐためには、どのような対策があるのか、教科書等を参考に考え、発表する。	思 ①	○	(学習活動2) 傷害の防止について、それらに関わる事柄や情報などを整理したり、個人生活と関連付けたりして、自他の課題を発見している内容を【観察・ワークシート】で捉える。〈思－①〉
4 自然災害による傷害の防止	自然災害などによる傷害の防止について、習得した知識を自他の生活に適用したり、傷害の状態に合わせて悪化を防止する方法を見いだしたりして、傷害を引き起こす様々な危険を予測し、回避する方法を選択するとともに、自然災害による傷害は、災害発生時だけでなく、二次災害によっても生じることについて理解することができるようにする。 1 過去の大地震の資料を見て、どのような傷害が発生したかを調べたり、これまでの自分たちの生活を振り返ったりする。 2 大地震が起こった時の自分たちの行動を予想する。 3 「災害から命を守るために～防災教育教材～企画：文部科学省」を視聴し、二次災害によって傷害が生じることがワークシートにまとめる。	思 ② 知 ③	○	(学習活動1・2) 自然災害などによる傷害の防止について、習得した知識を自他の生活に適用したり、傷害の状態に合わせて悪化を防止する方法を見いだしたりして、傷害を引き起こす様々な危険を予測し、回避する方法を選択している内容を【観察・ワークシート】で捉える。〈思－②〉 (学習活動3を第5時授業後に評価) 自然災害による傷害は、災害発生時だけでなく、二次災害によっても生じることについて、言ったり、書き出したりしている内容を【観察・ワークシート】で捉える。〈知－③〉
5	自然災害による傷害は、災害に備えておくこと、安全に避難することによって防止できることについて理解することができるようにする。 1 地震などの自然災害に対して、各家庭で備えていることを出し合い、教科書等のチェックシートで確認する。 2 防災に関する映像資料を視聴し、傷害を防止するために必要なことをグループで検討し、発表する。 3 本時のまとめをワークシートに記入する。	知 ③	○	(学習活動3) 自然災害による傷害は、災害に備えておくこと、安全に避難することによって防止できることについて、言ったり、書き出したりしている内容を【観察・ワークシート】で捉える。〈知－③〉

6 応急手当の意義と実際	応急手当を迅速かつ適切に行うことによって、傷害の悪化を防止することができるようにして理解することができるようにするとともに、包帯法や止血法としての直接圧迫法ができるようにする。 1 応急手当の意義や手順について、課題の解決に向けて話し合う。 2 応急手当の基本を確認し、患部の保護や固定、止血の行い方を教科書や視聴覚教材で確かめる。 3 包帯法と直接圧迫法の実習を2人組で行い、知識や技能をワークシートにまとめる。	知④		(学習活動3を第7時授業後に評価) 応急手当を迅速かつ適切に行うことによって、傷害の悪化を防止することができることについて、言ったり、書き出したりしているとともに、包帯法や止血法としての直接圧迫法ができる状況を【観察・ワークシート】で捉える。〈知－④〉
7	応急手当には、心肺蘇生法があることについて理解することができるようにするとともに、心肺蘇生法ができるようにする。 1 倒れている人を発見した場合を想定した応急手当の手順について、課題の解決に向けてグループで話し合う。 2 応急手当の順序や心肺蘇生法の行い方を教科書や視聴覚教材で確かめる。 3 心肺蘇生法の実習をグループで行い、知識や技能をワークシートにまとめ、発表する。	知④	○	(学習活動3) 応急手当の方法について、言ったり、書き出したりしているとともに、心肺蘇生法ができる状況を【観察・ワークシート】で捉える。〈知－④〉
8	傷害の防止について、課題の解決に向けた学習活動に自主的に取り組み、自他の危険の予測や回避の方法と、それを選択した理由などを、他者と話し合ったり、ノートなどに記述したりして、筋道を立てて伝え合うことができるようにする。 1 今までの学習内容を確認する。 2 傷害のケースを示した場面カードを引き、傷害の発生した場面やけがの状況に適した応急手当の方法と手順や、危険を予測し、回避する方法を考え、グループで話し合う。 3 単元を通して学んだことをこれからの生活にどのように生かしていくかをワークシートに記入し、発表する。	思③ 態①	○ ○	(学習活動2を授業後に評価) 傷害の防止について、自他の危険の予測や回避の方法と、それを選択した理由などを、他者と話し合ったり、ノートなどに記述したりして、筋道を立てて伝え合っている内容を【観察・ワークシート】で捉える。〈思－③〉 (学習活動2) 傷害の防止について、課題の解決に向けた学習活動に自主的に取り組みようとしている状況を【観察】で捉える。〈態－①〉

※重点…各時間の中で重点的に生徒の学習状況を見取る観点とする。

記録…単元の評価規準に照らして、全員の学習状況を記録に残す観点に○を付した。

※重点としていない観点についても、教師の指導の改善や生徒の学習改善に生かすために、生徒の学習状況を確認することは重要である。

4 観点別学習状況の評価の進め方

(1) 基本的な考え方

本単元は(ア)交通事故や自然災害などによる傷害の発生要因、(イ)交通事故などによる傷害の防止、(ウ)自然災害による傷害の防止、(エ)応急手当の意義と実際と4つの学習のまとまりで構成されている。ここでは、知識や技能を確実に習得し、それらを自分たちの生活にあてはめたり、関連付けたりして学習を進められる授業づくりをし、それを踏まえた指導と評価を進めて行くこととした。

観点別学習状況の評価を効果的・効率的に進めるために、3観点の評価を重点化する必要がある。そこで、本事例では、重点的に生徒の学習状況を見取ることができるよう、3観点を精選した。特に、記録に残す評価については、総時数が8時間であることから、8つに絞って設定した。具体的には、第1時から第5時と第7時は1観点として重点化し（第6時は記録に残す評価はなし）、単元のまとめとなる第8時のみ2観点とした。その際、「知識・技能」については、すべての時間に重点や記録に残す評価を入れるのではなく、傷害の防止について理解したことを言ったり、書き出したりする活動について、それぞれの学習のまとまりの学習内容と学習活動に対応させてバランスよく評価することとした。また、「思考・判断・表現」については、課題を発見し、よりよい解決に向けて思考したり、様々な解決方法の中から適切な方法を選択するなどの判断をしたりするとともに、それらを他者に表現する活動を設定し、単元を通して課題の発見、解決、表現が評価できるように工夫することとした。「主体的に学習に取り組む態度」については、単元のはじめとおわりに評価場面を設定し、教師の指導改善につなげることや「努力を要する」状況と判断した生徒の変容を見取ることができるようにした。

「知識・技能」の評価に当たっては、事例の第6時と第7時では実習を伴うことから、学習のまとまりである2時間分を授業後にまとめて評価することとした。また、知識を習得しながら、実習を行うことができるような学習活動を設定した。ワークシートを中心として、観察による評価も行い、実習を通して理解を深め、基本的な技能を身に付けている学習状況を確認できるように、ワークシートの項目を工夫することが重要である。さらに、既存の知識及び技能と関連付けたり、活用したりする中で、他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり、技能を習得したりしているかについても評価できるように工夫することも考えられる。なお、実習については、技能の出来映えのみを評価するのではなく、知識と一体的に評価することに留意したい。

「思考・判断・表現」の評価に当たっては、例えば、ワークシートを中心としつつ、観察で補うことも考えられる。ワークシートによる評価においては、評価する観点に応じた項目を設定することが重要である。本事例では、ワークシートにより思考・判断・表現を評価する際には、傷害の防止に関わる事象や情報から課題を発見し、自他の危険の予測を基に、危険を回避したり、傷害の悪化を防止したりするなど、思考の過程が分かるような項目を工夫することとした。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価に当たっては、事例の第1時では教師の指導改善につながる評価を行うこととした。特に、「努力を要する」状況と判断した生徒へは、手立てを講じて継続した指導を行い、第8時に記録に残す評価場面を設定し、課題を解決する学習活動に取り組む態度で変容を見取ることができるようにした。なお、単に継続的な行動や積極的な発言を行うなど、性格や行動面の傾向を評価することでないことに留意したい。自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、粘り強く取

り組もうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要である。

(2) 観点別学習状況の評価の実際

各観点における生徒の学習状況については、具体的にその状況を捉え、その学習状況にある背景と指導の方向を考えていくことが大切である。

①「知識・技能」の例

単元の評価規準 ① 第1時
交通事故や自然災害などによる傷害は、人的要因や環境要因などが関わって発生することについて、言ったり、書き出したりしている。
第1時では、傷害の発生要因についてまとめる場面で、交通事故や自然災害などによる傷害は、人的要因や環境要因などが関わって発生することについて発言やワークシートに書き出している内容から、判断していく。
「十分満足できる」状況にあると判断するポイント
・傷害の発生について、人的要因や環境要因が関わって発生することについて、具体例を挙げて言ったり、書き出したりしている。また、他の学習や生活の場面でも活用できる概念を理解している。
「努力を要する」状況と判断した生徒への手立て
・このような状況は、傷害の発生が人的要因と環境要因が関わって発生することについて、学習内容が定着していないことが原因として考えられるため、身近な事例を示したり、必要に応じて学習を振り返らせたりして個別に説明する。

単元の評価規準 ④ 第6・7時(第7時授業後に評価)
応急手当を迅速かつ適切に行うことによって、傷害の悪化を防止することができることや、応急手当の方法について、言ったり、書き出したりしているとともに、包帯法や止血法としての直接圧迫法、心肺蘇生法ができる。
第6・7時では、包帯法や直接圧迫法、心肺蘇生法の実習をグループで行い、話し合ったことをワークシートにまとめる場面で、応急手当を適切に行うことによって、傷害の悪化を防止できることや応急手当の方法について発言したり、ワークシートに書き出したりしている内容や実習の状況を観察し、判断していく。
「十分満足できる」状況にあると判断するポイント
・患部の保護や固定、止血や心肺蘇生法などの応急手当を行うことによって、傷害の悪化を防止できることについて、理解したことを具体例を挙げて言ったり、書き出したりするとともに、状況に応じた応急手当の技能を身に付けている。また、他の学習や生活の場面でも活用できる概念を理解している。
「努力を要する」状況と判断した生徒への手立て
・このような状況は、応急手当の基本についての学習内容が理解できていないことが原因として考えられるため、教科書を参考にしたり、仲間とともに学習を振り返らせたりし、個別に説明する。

②「思考・判断・表現」の例

単元の評価規準 ① 第3時
傷害の防止について、それらに関わる事柄や情報などを整理したり、個人生活と関連付けたりして、自他の課題を発見している。
第3時では、傷害の防止について、教科書等を参考にして、課題や解決の方法を見付ける場面で、事故や犯罪が原因となる傷害における課題及びそれらを防止するための対策を見付け、発表したり、ワークシートに書き出したりしている内容から、判断していく。
「十分満足できる」状況にあると判断するポイント ・事故や犯罪が原因となる傷害における課題及びそれらを防止するための対策について、学習したことを基に、自分たちの生活と関連付けたり、理由を付け加えたりしながら、具体的な課題や対策について説明している。
「努力を要する」状況と判断した生徒への手立て ・このような状況は、具体的な課題や対策を思いつかないなどが原因として考えられるため、事故や犯罪における具体的な課題や対策を教師が例示したり、教科書の読み取りを補足したりする。

単元の評価規準 ③ 第8時
傷害の防止について、自他の危険の予測や回避の方法と、それを選択した理由などを、他者と話し合ったり、ノートなどに記述したりして、筋道を立てて伝え合っている。
第8時では、傷害のケースを示した場面カードを引き、傷害の発生した場面やけがの状況に適した応急手当の方法と手順や、危険を予測し、回避する方法を考える場面で、学習したことをそれぞれの場面にあてはめて他の生徒に説明したり、ワークシートに書き出したりしている内容から、判断していく。
「十分満足できる」状況にあると判断するポイント ・応急手当の方法と手順や、危険を予測し、回避する方法について、学習したことをそれぞれの場面にあてはめるときに、改善点や根拠を挙げるなどして、それらを説明している。
「努力を要する」状況と判断した生徒への手立て ・このような状況は、場面カードの事例と今までの学習が結び付けられないことなどが原因として考えられるため、前時の実習やワークシートにまとめた内容を確認し、場面カードの事例と結び付けよう、個別に説明する。

③「主体的に学習に取り組む態度」の例

単元の評価規準 ① 第8時
傷害の防止について、課題の解決に向けた学習活動に自主的に取り組もうとしている。
第8時では、前時までに学習したことをそれぞれの場面にあてはめて他の生徒に説明したり、ワークシートに書き出したりするなどの活動に自主的に取り組もうとしている状況を観察し、判断していく。
「十分満足できる」状況にあると判断するポイント ・場面カードを引き、傷害の発生した場面やけがの状況に適した応急手当の方法と手順、危険を予測し、回避する方法を考える時に、前時までに学習した概念的な知識と自分たちの生活を結びつけ、試行錯誤して自らの学習を調整しながら、粘り強く自主的に取り組んでいる。

「努力を要する」状況と判断した生徒への手立て

- このような状況は、傷害のケースを示した内容と既習事項が結び付かないといった原因が考えられるため、一つの場面を例に挙げて説明する。

5 観点別学習状況の評価の総括

本単元では、単元の評価規準に照らし、「十分満足できる」状況（A）、「おおむね満足できる」状況（B）、「努力を要する」状況（C）状況により評価を行った。

（1）評価結果のA，B，Cの数を基に総括する

	時 観点	1	2	3	4	5	6	7	8	
		傷害の 発生要因	交通事故などによる 傷害の防止	自然災害による 傷害の防止		応急手当の意義と実際				
評価 機会	知・技	①	②	—	—	③	—	④	—	総括
	思・判・表	—	—	①	②	—	—	—	③	
	主体的態度	—	—	—	—	—	—	—	①	
生徒 1	知・技	A	B	—	—	A	—	A	—	A
	思・判・表	—	—	B	A	—	—	—	A	A
	主体的態度	—	—	—	—	—	—	—	A	A
生徒 2	知・技	B	C	—	—	C	—	C	—	C
	思・判・表	—	—	B	B	—	—	—	C	B
	主体的態度	—	—	—	—	—	—	—	B	B

- 単元の総括については、Aが半数を超える場合にはA、Cが半数を超える場合にはC、それ以外はBとする考え方に立って総括を行った。また、AとCが同一観点到に混在する場合は、Bに置き換えて集約している。（例：AとCが各1つ → Bが2つ）
- 「A A B B」の総括結果をAとするかBとするかなど、同数の場合や三つの記号が混在する場合の総括の仕方をあらかじめ決めておく必要がある。
- 「知識・技能」、「思考・判断・表現」については、各授業後や単元終了後にワークシートや定期テスト等からも評価することで、評価の信頼性を高めることができる。

（2）評価結果のA，B，Cを数値に置き換えて総括する

- 評価結果A，B，Cを、A＝3，B＝2，C＝1のように数値によって表して、平均することで総括することができる。
- 総括の結果をBとする範囲を $[2.5 \geq \text{平均値} \geq 1.5]$ とすると、平均値が2.5を上回る場合はA、平均値が1.5未満の場合はCとなる。

	時 観点	1	2	3	4	5	6	7	8	平均	総括
生徒1	知・技	3	2	—	—	3	—	3	—	2.75	A
	思・判・表	—	—	2	3	—	—	—	3	2.67	A
	主体的態度	—	—	—	—	—	—	—	3	3.00	A
生徒2	知・技	2	1	—	—	1	—	1	—	1.25	C
	思・判・表	—	—	2	2	—	—	—	1	1.67	B
	主体的態度	—	—	—	—	—	—	—	2	2.00	B